

オンラインレクチャーシリーズ 第2回 山口泰雄氏講演

「生涯スポーツ論研究のこれまでとこれから」

2025 年 9 月 19 日 18 : 00～20 : 00

講師：山口泰雄（神戸大学名誉教授）

司会進行：清水 諭（筑波大学）

清水：皆さん、こんにちは。本日の講師は、山口泰雄先生、神戸大学名誉教授であります。皆さんご存じのように、日本体育学会の体育社会学専門分科会の会長でもありました。

本日は、生涯スポーツ、スポーツ・フォー・オールといったキーワードを中心にして、多くのことを研究されてきた山口先生よりお話しいただけると思います。山口先生から 1 時間ほどお話ししていただき、その後 1 時間ほど皆さんからご質問を含め、ディスカッションをしたいと思います。ディスカッションも録音しますので、お名前、所属を述べていただき、また録音した後にお名前と話された内容が公開されますことをご了承ください。

それでは、山口先生、よろしくお願いいたします。

【山口先生の講義】

〇はじめに【スライド p.2】

神戸大学の山口です。世界陸上を皆さんご覧になってますか？面白いですね。91 年の東京の時は観客として見て、2007 年の大阪は組織委員会のメンバーに入っていました。今回はテレビを通して楽しんでいます。何と言ってもアスリートのフィジカルに見とれてしまう、というか、古代のギリシャとかローマの彫像を思い浮かべます。

それから一番嬉しいのは、やっぱり国立競技場のチケットがソールドアウトしているということです。こんなに嬉しいことはありません。

5 月に清水先生からオンラインレクチャーの依頼がありました。実はちょっと迷いました。すでに神戸大学を退職した後、流通科学大学も退職して、「サンデー毎日」でもないんですけども、晴耕雨読とテニス中心の生活を過ごしていたからです。私は次世代育成という言葉に弱いんですが、今後の次世代育成というミッションの一助になればと思い、お受けすることにしました。

今回は生涯スポーツ論研究のこれまでとこれからというテーマをいただきました。ここでは、生涯スポーツというテーマをモノグラフという形、すなわち山口がどのようにアプローチしてきたのかをライフステージに分けてお話しさせていただきたいと思います。

というのは、私の学生時代には生涯スポーツはまだ存在していませんでした。卒業後、社会人になり、その後大学院に入学したときに生涯スポーツという書籍が出版されました。

「表 1 生涯スポーツ政策の系譜」は、生涯スポーツの系譜として月刊誌『健康づくり』に掲載されたものです。ここでは、生涯スポーツがどのように国の政策として採用され、発展してきたのかを探ります。

1940 年代から 60 年代は、生涯スポーツは生まれておらず、体力づくり政策が中心で萌芽期と名づけました。東京 1964 オリンピック開催のため、1961 年に「スポーツ振興法」が制定され、翌年には文部省体育局に「スポーツ課」が開設されました。東京オリンピックは戦後復興のシンボルとして開催され、テレビの普及にもよりスポーツの価値を高めました。その後の強化は、アスリートの体格と体力不足というフィジカルに焦点が当てられ、翌年には「体力づくり国民会議」が組織され、体力づくり政策が前面に打ち出されました。

1970 年代に入ると社会体育政策の時代になります。学校体育に対して、社会人に対して体育を振興しようという文脈です。1987 年には保健体育審議会の答申により、文部省が「社会体育指導者認定制度」をスタートしました。1982 年に「生涯スポーツ推進指定市町村」というモデル事業が始まりますが、これがおそらく国の事業に生涯スポーツが採用された最初かなと思っています。この背景は、あとで詳しく話しますが、生涯スポーツに関する書籍の出版がありました。

生涯スポーツのスポーツ政策に対してスポットライトが当たるようになったのは、1988 年の文部省の機構改革で、それまでのスポーツ課が「生涯スポーツ課」と「競技スポーツ課」に分離されたことによるものです。そして、生涯スポーツ政策として「全国スポレク祭」正確には「全国スポーツ・レクリエーション祭」が始まりました。その結果起こったのは、スポレク祭に参加するために、様々なニュースポーツ種目が都道府県からのトップダウンで組織化され、普及しました。また、「生涯スポーツコンベンション」が 1990 年に東京で開催され、スポーツ団体やスポーツ行政、そして関連機関が集まり、生涯スポーツ振興に大きな貢献をいたします。

第 1 回から組織委員会のメンバーでしたが、毎回、東京の京王プラザホテルで年度末の 2 月に開催されていました。コンベンションが終わり、組織委員会の振り返りの会で毎回私は地方開催を提案していましたが、スルーされました。なぜかというと、スポーツ団体の事務局はほとんど東京にあるからです。地方にいろいろな資料を持って行きたくないのです。5 ～6 回提案してから同じ提案をすると、広告代理店の博報堂担当者が賛成してくれ、翌年から大阪、そして福岡と地方開催が国体と同じように連続し、地方のスポーツ関係者の参加と地元メディアが取り上げたことにより、生涯スポーツのコンセプトと種目が広がりました。

2000 年から 2020 年代は制度化政策により生涯スポーツが成熟期を迎えています。様々な生涯スポーツ政策が施行されますが、「スポーツ振興投票法」が公布されたことにより、安定したスポーツ振興財源が確保されたことが大きいと言えます。また、2011 年の「スポーツ基本法」の策定公布が大きなランドマークになり、その後の「スポーツ基本計画」へと発展しました。

右の「表 2 背景とファクト」をご覧ください。生涯スポーツの振興と研究において重要な視点は、ヨーロッパにおけるスポーツ・フォー・オールムーブメントの広がりです。スポーツ・フォー・オールは 1950 年代から 60 年代において誕生しています。その中で、イギリスのスポーツカウンシル (Sport Council) の「ウォルフendenリポート」レポートの

中に「スポーツ・フォー・オールコミュニティ」という用語が使われています。おそらくそれが「スポーツ・フォー・オール」へと変化したのだと思っています。

そして、イギリス、ドイツ、ノルウェーを中心に広がっていきます。ドイツ、ノルウェーではトリム運動というのが始まっています。トリムはもともと船舶用語なのですが、船のバランスをとるという意味で使われていました。そして、心と体のバランスをとることに変化します。イギリスはスポーツクラブ発祥の地ですが、ドイツでもスポーツクラブが誕生し、その背景には民主化運動と共に発展してきたという歴史があります。

1969年にオスロでの「第1回 TAFISA コンgress」は、当時、隔年開催の国際会議でしたが、その後、スポーツ・フォー・オールがヨーロッパに広がっていきます。さらに、ヨーロッパ評議会（Council of Europe）においてヨーロッパ・スポーツ・フォー・オール憲章が採択されたことにより、スポーツ・フォー・オールがヨーロッパから世界へと広がり、日本も大きな影響を受けました。そして1977年に、平澤先生と糸野先生による『生涯スポーツ』がプレスギムナスチカから出版されました。

1984年には社会体育指導者養成を目的にした鹿屋体育大学が開学されています。1988年には、文部省に生涯スポーツ課が開設され、全国スポレク祭が始まり、同じ年に厚生省のアクティブ80ヘルスプランが発表され、高齢者を対象にした「ねんりんピック」も始まったことから、1988年を「生涯スポーツ元年」と名づけました。

次に、保健体育審議会のことについて触れます。これは、国の体育・スポーツ政策を審議し、答申を発表してきた重要な機関です。1997年には、「生涯にわたる健康・スポーツの振興」において、生涯スポーツがライフステージにおける重要な位置づけをされました。これが保体育審答申の最後になります。以後、中央省庁の再編を受けて、中教審（中央教育審議会）スポーツ・青少年分科会が答申を出すことになり、2000年の「スポーツ振興基本計画」の発表につながります。

2010年には「スポーツ振興法」から50年後に「スポーツ基本法」の制定を受け、2011年に「スポーツ基本計画」が発表されました。また、2015年にはスポーツ関係者待望のスポーツ庁が発足しました。鈴木長官、室伏長官と続き、10月からは河合純一長官が決まっています。河合さんは全盲のパラ水泳金メダリストで、大変誠実な方です。2020年は祝日法が改正され、これ重要な改正なんですけども、体育の日からスポーツの日に変わります。2021年には東京2020オリパラが無観客で開催されました。パンデミックの中で開催できたのは恐らく日本だけではないかと思ひ、日本の大きな功績でした。そして、今年2025年には「改正スポーツ基本法」が公布され、2度開催が延期された「ワールドマスターズゲームズ2027 関西」へとつながっていきます。

○生涯スポーツとは？【スライド p.3】

ここではまず、生涯スポーツの定義の方をご覧ください。1977年に出版された平澤・糸野先生による『生涯スポーツ』は、幼児、児童、青年、成人、高齢者のための生涯スポーツ

論で、ポール・ラングランが理論的ベースになっています。ポール・ラングランは、1965年、ユネスコにおいて生涯教育の課題として、体育・スポーツや余暇教育の重要性を指摘しました。それまでの学童期のスポーツ振興だけでなく、幼児、児童、成人、高齢者に至る生涯において、スポーツが人生の重要な位置を占めることを強調しています。

これは先程述べた 1975 年、ヨーロッパ評議会（Council of Europe）による「ヨーロッパ・スポーツ・フォー・オール憲章」（European Sport for All Charter）です。その第 1 条には、「すべての個人は、スポーツに参加する権利を持つ」と書かれています。第 2 条は、「…このための援助は、公的財源からの支出をもってなされなければならない」と書かれています。スポーツは、単なる文化ではなく、国や自治体はスポーツ参加の権利を保障しなければならないと価値を高めたわけです。

1988 年、文部省スポーツ課は、「生涯スポーツ課」と「競技スポーツ課」に分化されましたが、当時、生涯スポーツは「いつでも、どこでも、誰にでも」という一種のスローガンであったわけです。そこで生涯スポーツに関する明確な定義とコンセンサスはなかったことから、「幼児期から高齢期に至る各ライフステージにおいて、個人の年齢、体力、選好に合った運動やスポーツを継続して楽しむこと」と提唱しました。

○ライフステージごとの取組：選択と出会い【スライド p.3】

次に、これまで約 50 年間の研究者人生をライフステージごとに振り返ってみたいと思います。ライフステージは 6 つのステージで、最後に生涯スポーツのこれからと研究課題をまとめることにします。ステージは次の 6 つの通りです。

1. 大学院のきっかけ：生涯スポーツと恩師との出会い（1975-79）【スライド p.4】

まず大学院のきっかけですが、その前にスポーツとの出会いは小学 6 年生の時、テレビの東京オリンピックの閉会式でした。10 月 10 日の整然とした開会式を予想していましたが、閉会式は各国の選手が入り交じって入場し、びっくりしました。日本人の旗手は、西洋人選手に肩車され、日の丸を振っています。そして、すべての選手は笑顔で、充実した表情にあふれていました。

これには予定外のハプニングというバックストーリーがあります。開会式では、英国領北ローデシアで入場しました。それが閉会式で待機しているときに独立が決まり、ザンビアになったという知らせが入ります。すべての競技を終えた選手は素晴らしい東京・日本でのおもてなしに感激し、係員の制止を振り切って、国の区別なしになだれ込むような形になったんです。これを見て、小学生の私は大きな衝撃を受けました。スポーツは人々を一つにし、平和が可能になるかもしれない。そして、少年野球少年だった私は、スポーツの世界で生きたいと決意しました。

タイガースの近本選手、そして楽天の辰巳選手を輩出した兵庫県立社高校体育科を卒業し、東京学芸大学に進学しました。4 年生の夏に高等学校の保健体育教師の採用試験を受け

て合格していたんですが、その社高校の恩師から電話がかかってきて、兵庫県立姫路工業大学の助手の面接試験を受けるようにとのことでした。同大学の教授が県教委に行って、来春、山口という助手を採用することにしたという話を指導主事の恩師にしたところ、「こんな山口もいるよ」と私のことを思い出して紹介していただいたんです。その時、私のことを思い出していなかったら、きっと今頃は高校体育教員を退職していたことだと思います。人生は、社高校体育科を選択し、恩師との出会いが今の研究者人生につながりました。

東京学芸大学では、嘉戸修先生の体育社会学ゼミを選択しました。菊先生と同じです。その後、県立大学で 2 年間助手をしてから筑波大学の大学院に進み、糸野豊先生が指導教官になりました。その年（1977）に、『生涯スポーツ』が刊行されたのです。これが生涯スポーツとの出会いでした。

糸野先生には、生涯スポーツの先進地のフィールドワークに連れて行っていただきました。神戸の垂水団地スポーツ協会と明石コミュニティセンターを視察しました。その夜の懇親会に、社高校体育科主任の恩師が県教委の体育課長として参加されていたんです。私は頭が上がりなかつたんですけども、何でだろうと思ったら、その恩師は糸野先生と東京教育大学の同級生だったんです。英語圏では、こういうとき “such a small world” と言います。日本語の「狭いね」と同じなんです。

建設途上であった筑波大学の糸野研究室に、たまたまアメリカ帰りの池田勝先生がおられました。初対面の日、「お前、麻雀できるか？」と聞かれて、「並べるくらいはできます」と言ったと思います。その夜、先生宅で麻雀をしたのが出会いでした。池田先生は披露宴のスピーチでいつも決まったセリフがあって、「私は恩師ではなく、怨念の恩師です」と笑いをとっていたことを覚えています。池田先生はイリノイ大学で学ばれているんですけども、SPSS を筑波大学に初めて持ち込まれて、我々院生は先生の先見性と強烈な人間性に啓発されました。そして、分野を超えた院生やゼミ生が、トランプではないんですけど、「GMGA(グッドモーニング・グッドアブストラクト)」という早朝ゼミに集まりました。池田先生は、ケネス・クーパー (Kenneth H. Cooper) をアメリカから招き、エアロビクス理論を紹介されました。ニュースポーツや企業フィットネスも池田先生の業績です。当時、同じ院生だった原田宗彦さんは、お互いに指導教官が別で、ウラ指導教官が池田先生でした。彼は 1 年先にアメリカへ留学し、その後私はカナダに留学しました。このきっかけを作っていただいたのも池田先生でした。

2. カナダ留学・サバイバル時代 (1979-84) 【スライド p.5】

カナダのウォータールー大学に留学したものの、肝心の TOEFL は基準点に達していませんでしたので研究生でした。当時、ちょっと暗い時代がありまして、安らぎの場はトイレで日本語の雑誌か文庫本を見てるという時だけでした。救いはテニスで、英語はイマイチだけどテニスはうまいということでテニス友達ができ、何とか 3 ヶ月後に現地での TOEFL に合格しました。指導教官は、ジェラルド・ケニヨン (Gerald S. Kenyon) とベアリー・マ

クファースン (Bary McPherson) で、主にマクファースン先生から指導を受けました。正規の院生になった時、マクファースン先生から学部の 3 科目を受講し、「平均 (Average B)」を取るように言われました。そして、「B」が取れなかったら、日本へ帰れと言われました。冬学期の成績は、「B+」「B」「B-」でジャスト B でした。何とか首の皮が繋がりました。

あと、北米の大学院 Ph.D. コースは 4 つのステップがあります。1 つは単位取得、2 つ目に総合試験 (Comprehensive Exam.) があります。3 番目が Proposal (研究計画の発表) です。そして、4 番目が最終試験 (論文発表) と進むんですけども、最も難関なのが Comprehensive Exam. です。筆記、口頭、小論文という 3 分野があり、3 分野すべてに合格しなければ、次へと進むことができません。この時期に結婚している院生の多くは離婚の危機を迎えます。

留学生時代は、平日はだいたい 3 時間睡眠で、金曜の夜に "Thanks God it's Friday" と言って、ぐっすり眠り睡眠不足を解消します。今でも、その習慣が残っていて、寝る前に「何時に起きるぞ」と暗示をかけると、目覚ましがなくともだいたい起きることができます。5 年間の留学生活は、研究者としての基礎を作り、どんな状況でも生き残れるという自信につながりました。

3. 「駆け出し」鹿屋体育大時代 (1984-90) 【スライド p.6】

このスライドは、体育大学に勤めた駆け出しの時代です。1984 年の 4 月、学位を取得した後、ケニヨン先生の誘いでアルバータ州のレスブリッジ大学で研究員をするはずでした。ケニヨン先生は、当時副学長をされていました。そこへ池田先生から電話が入り、悪魔の囁きのように「鹿屋体育大学が 4 月に開学するので、5 月で構わないから早く鹿屋に帰ってくるように」ということ。

翌 85 年から専任講師として採用が決まっていたんですが、1 年間は非常勤講師として何でも屋の駆け出し時代が始まりました。実際、最初の 1 学期は英会話を教えていたもので、学生は当初私のことを英会話教師と思っていたらしいです。鹿屋体育大学では国際シンポジウムや様々なイベントが開催されましたが、大学を訪ねて来られる際は、鹿児島空港まで送迎の運転手もよく務めました。その結果、何人もの学会の重鎮と面識ができ、シンポジウム開催などのほか執筆依頼が続き、この頃は原稿を書きまくりました。

1989 年に学長裁定プロジェクトにより『生涯スポーツの理論とプログラム』をまとめました。当時は、国民スポーツ、生涯体育、みんなのスポーツ、大衆スポーツ、トリムなど関連団体がそれぞれの構想により異なるスローガンでプランを実施しており、国民には非常にわかりにくかった。そこで、「生涯スポーツ」を提案しました。その社会的背景として、①生涯学習論 ②スポーツ・フォー・オール (Sport for All)ムーブメントが世界で広がっていることを説明しました。そして、生涯スポーツの理論的枠組みを①ライフサイクル・アプローチによる 6 つのライフステージと、スポーツ社会学の主要理論である②スポーツへの社会化モデル、そして参加継続、離脱、再社会化という社会化アプローチで解説しました。

この報告書は、いろいろなキーパーソン、そして文科省にも送ったのですが、その後、プレゼンテーションの機会や執筆依頼が増えていきました。

鹿屋体育大学時代は何ととっても職住接近で、娯楽もないことから、学生とよくバーベキューを楽しみました。教員宿舎にもよく学生が訪ねてきて、幼い子どもたちの遊び相手もしてくれました。鹿屋体育大学の駆け出し時代には、2つのライフイベントとの出会いがありました。1つは、生涯スポーツの現地におけるイベント調査、もうひとつはライフワークになった TAFISA（国際トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会）との出会いでした。

1988 年の秋、地元の KKB 鹿児島テレビで「指宿菜の花マラソンボランティア募集！」という CM が流れたんです。当時は、ロサンゼルス 1984 オリンピックやカルガリー1988 冬季オリンピックで、ボランティアが活躍したということは知っていましたが、地元の地域イベントで市民マラソン大会のボランティアが公募されていると聞いて、「これおもしろい！」と直感しました。そして、翌日の地元紙には、マラソン大会の開催により指宿温泉に観光客が戻ってきたということが掲載されました。指宿や宮崎県の青島は、かつての新婚旅行のメッカでした。それが沖縄に取られ、オーストラリア、ハワイに取られ、アメリカのテーマパークに新婚旅行客がシフトしていきます。そして、指宿が無視されていたのです。翌日、体育経営管理学ゼミの野川さんや菊池さんと一緒にまさかり海岸にあるラーメン屋でのランチの際に、菜の花マラソンのことを話したのです。ラーメンを食べ終えた時には、野川さんがランナー調査、菊池さんが経営者調査、私がボランティア調査と役割が決まりました。そして、イベントの前日から指宿温泉に入り、各班でインタビューマニュアルを確認し、調査に臨みました。「1988 年指宿菜の花マラソン調査」が我が国初の地域スポーツイベントの現地調査になったのではないかと思います。そして、翌年から定年の 2018 年まで、毎年 2～3 のフィールドワークによりデータ収集を重ねてきました。

もう 1 つの出会いは、1989 年の国際トリム・フィットネスコンGRESSへの参加です。同コンGRESSのルーツは、1969 年にオスロで開催された「国際トリム会議」です。隔年開催の国際会議ですが、1975 年にアメリカ、ワシントン DC での開催時から、フィットネスが加わって、「国際トリム・フィットネス会議」になります。そして、最後はカナダのトロントで開催された 1989 年の「国際トリム・フィットネス会議」でした。この時の会議の内容と運営は素晴らしく、主催団体はカナダにおけるフィットネスの非営利団体であるパーティシパクションの功績でした。同会長であったラス・キスビー（Russ Kisby）さんは、非常に明るく前向きで素晴らしい人間性のリーダーでした。このコンGRESSの成功により、2 年後の 91 年にフランスのボルドーにおいて TAFISA（国際スポーツ・フォー・オール協議会）が設立されました。スポーツ・フォー・オール運動のリーダーであったドイツスポーツ連盟のユルゲン・パルム（Jurgen Palm）さんは、非常にオープンマインドな方で、大きな啓発を受け、スポーツ・フォー・オールの実践と研究が私にとってのライフワークになりました。

4. 「そして神戸」 導入期（1990-99）【スライド p.8】

「そして神戸」ということですが、鹿屋にいる時に故郷の姫路で暮らしていた母親が脳梗塞で入院し、心配していた頃、神戸大学教養部から声をかけていただきました。当時は設置基準の大綱化に伴って、神戸大学の教養部を教養科学部にするという構想がありました。私にとっては「渡りに船」で、鹿屋体育大学1期生が大学院修士課程を卒業する時に私も一緒に卒業しました。

神戸大学教養部に異動してすぐの歓迎会の夜に、主任の先生から教養の保健体育科目の改革を何とかするようにと指示を受けました。そこで、2週に1回、講座構成員全員によるプレゼンテーションをしていただき、ワーキンググループを作って、委員長の下、運動生理、コーチ学の3名、そして私の4名がたたき台を作りました。このワーキングの際に、PDCAサイクルを導入し、保健体育実技の学生アンケートを実技受講生で実施すると、学生評価が非常に高く、さすがに神戸大学保健体育であると誇らしかったことを覚えています。これらの総合的な取り組みをベースにして、保健体育科目の改革により「健康・スポーツ科学」が誕生しました。今でも日本学術振興会の科研費のカテゴリーの中に、専門分野として「健康・スポーツ科学」が採用されています。この名前は、神戸大学発の名称として誇ることができます。

この時代は、「生涯スポーツ課」が文部省に置かれたことから、「生涯スポーツコンベンション」の企画委員会や講師などの仕事が増えてきました。97年には保健体育審議会の委員として参画し、生涯にわたる健康及びスポーツの答申に関わりました。また、なぜか体力・運動能力調査委員会のメンバーに入るように言われました。ほとんど運動生理と測定評価の方ばかりだったのですけれども、高齢者スポーツの研究をしてきたことから、「シニア体力テスト」の開発に加わりました。ただ、シニア体力テストができた後、すぐに委員として呼ばれて、体力テストを全面改訂するということになりました。そして、「新体力テスト」が生まれました。私の役割は海外の体力テストの現状を調べることでした。調べてみると、日本の当時のテストは7万人を超え、世界一のサンプル数でした。また、シャトルランがありますけれども、この時は河野一郎氏がカナダで導入されていたものを持って帰られてきました。子どもたちに実験をしてる時に、「どこでターンしていいかわからない」という声がありました。それで、「ドレミファ」をつけたらというように閃いて提案したら採用されました。この時期に週に3回、東京を新幹線で往復することが数回あって、新幹線を見るとちょっと気分が悪くなる新幹線恐怖症になりました。

5. 「続いて神戸」 成長期 (2000-09) 【スライド p.9】

21世紀になると兵庫県で県の仕事が増えました。中心は総合型クラブの「スポーツクラブ21ひょうご」でした。当時、兵庫県は県内の中学生の不登校率で全国ワーストワンが2年続きました。そして、神戸連続児童殺傷事件が発生し、子どもが危ないという状況だったのです。そこで、法人県民税という税金があって、1%超過課税するんですけども、これを活用して地域で子どもを育てる、スポーツを育てるということになりました。

当時、同県教育委員会の主幹が研究室を訪ねてこられ、低学年を対象にした運動遊び教室を企画し、これをやりたいと言われました。そして、「運動遊び教室は事業が終われば消滅しますが、総合型地域スポーツクラブだったら補助期間が終わっても存続しますよ」と提案したところ、2週間で計画ができてきました。当時は中学校区だったんですけども、すべての小学校に設立するという計画が採用されました。今だったら、計画書を各小学校で申請して審査され、助成団体を決めるという方式で採用されるのがベターだと思うんですけども、当時は県の担当者が小学校にすべて設立するということから、県の担当者から自治体職員が地域に対してお願いをして「作ってください」と、こういうふうに補助金を配布したんです。補助金が法人県民税から出ていることを知っている住民は皆無で、なかなか補助金事業は理解されませんでした。

あまりにもいろんなことに駆り出されたので、いつも「私は県の職員ではありませんよ」と言っていたんですけども、専門がスポーツ社会学、体育・スポーツ社会学であるということから、地元は恥ずかしいスポーツ行政になってほしくないという気持ちでした。今は実は反省しています。どうしてかという、国立大学職員は無償のコンサルと思われるようになってしまったからでした。

この時期に、3番目の研究テーマが確立しました。スポーツボランティア研究です。97年に文部省の中に「スポーツにおけるボランティア活動の実施等に関する調査研究協力者会議」が発足しました。3年間は国内調査を実施し、スポーツボランティアの定義を決め、98年からは科研費（国際学術）をいただいて、北米、オセアニア、ヨーロッパの現地調査を行いました。いろいろな知見を得ました。

そして、FIFA ワールドカップ 2002 の開催があったからこれを知ったのですが、FIFA ワールドカップ 1998 フランス大会に関するヒアリングに行った際に聞いたのが、ボランティア講習会の2回目になると2割ものドロップアウトが出たと聞きました。「なんでやねん」です。で、聞いたら、なんと1回目の講習会が終わった時にウェア・キャップなどのグッズを全部配布していたと。これが原因だったということがわかり、FIFA2002 ワールドカップ韓国・日本のボランティア講習会では、ボランティアグッズは、もちろん講習会終了後に配布されました。また、2007 世界陸上競技大会のボランティア推進委員長として、ボランティアリーダーの養成、それから講習会、事前事後調査などに関わることができました。

6. 「グローバル神戸」成熟期（2010-現在）【スライド p.10】

2011年に50年ぶりに「スポーツ振興法」が改正され、「スポーツ基本法」が策定されました。体育は、学校体育とほぼイコールで、スポーツが体育の上位概念に変わりました。今でも体育がスポーツより上位概念にあるのは中国と韓国だけだと思います。韓国の政策は日本モデルなので、留学生が日本から学んでいます。もう1つ、北京体育大学のハイ・レン（Hi Ren）先生によると、中国も同様で、日本に来ていた留学生が体育を中国に持ち帰っ

て、現在の国家体育総局に継承されているということもわかりました。

翌 2012 年に「中教審スポーツ青少年分科会」副会長になり、スポーツ振興特別委員長を拝命しました。そして、スポーツ基本計画の取りまとめを行いました。委員長は議論を活性化することがミッションと思い、毎回最初にすべるジョークを混ぜていたら、2 時間の会議は 2 時間半にも延びてしまいました。委員長はあまり自分の意見を発言できないのです。

そして審議会では、委員からの質問コメントに対して 3 つの対応があることを学びました。1 つは、質問があれば事務局からの回答を受け、事務局へ質問をする。もう 1 つは、いくつかの質問をまとめて議論する。そして 3 つ目は、「ご意見を賜りました」という、こういう 3 つの対応がありました。同委員会の審議は 13 回、9 カ月におよび、23 名の委員の名前について全員手を挙げたらすぐ言えるように覚えました。

また、スポーツ基本計画策定の委員会が立ち上がり、審議の様子が議事録に当時初めてアップされるということが始まりました。これが SNS で流れてから議事録へのアクセス数が飛躍的に伸び、全 13 回の議事録は 12,000 件のアクセス数に上りました。ステークホルダーである 17 のスポーツ団体からのヒアリングも実施しました。当時、日本体育学会はヒアリング対象団体になっていませんでしたので、入ってもらいました。

その後、ロンドン 2012 オリンピック日本チーム検証チーム座長、ソチ 2014 冬季オリンピック日本チーム検証チームの座長を務めました。生涯スポーツが専門の私からは対極の仕事に指名されたのは、おそらく競技団体との関係が薄く、利益相反にならないことと、ニュートラルな立場でいたからかと思います。

2015 年からは、神戸市スポーツ推進審議会会長、兵庫県スポーツ推進審議会会長にも任命され、国と地元のスポーツ政策にも関わらせていただきました。(スライド 10 ページ) このブルーの字のところが今でも継続しているところです。「サンデー毎日」というわけでもありませんが、半分くらいはもうボランティアという感じです。

この時、2011 年から神戸マラソンも始まりました。前年に、フルマラソン検討委員長に指名されました。基本構想の確定に 1 年近く要したのですが、1 番重要だったのは、コースと日程です。この 2 つが一番ポイントでした。特に、運送業団体から反対意見が多かったんですけれども、あともちろん県警も反対が多かったです。そこで考えたのは、神戸市政モニターと兵庫県民アドバイザーに対して、ネットによる質問紙調査を実施しました。その結果、「神戸開催のマラソン大会を誇りに思う」「ボランティアで協力したい」「神戸らしいコースを走ってほしい」という地域住民やサポート派が非常に多かったのです。その結果、ネガティブな質問意見が減りました。また、毎回フィニッシュしたランナーアンケートを担当し、ゼミの OB や OG のサポートを受けていたこともうれしいことでした。調査結果の課題について、その年の課題は翌年の大会において改善するという PDCA サイクルを実践しました。

この時期を振り返ってみると、新しいプロジェクトをいろいろスタートさせています。2010 年の「神戸ジュニアスポーツリーダー講習会 (KJSL)」、2011 年「ユーハイム・スポ

ーツフォーラム」、2012 年「アジア次世代スポーツ（社会）科学フォーラム」。私は、スポーツ社会科学フォーラムに参加したのですけれども、KJSL は、ボランティアの国際調査に関わった時、ニュージーランド、オーストラリア、イギリスでジュニアスポーツリーダーの講習会があったことがきっかけでした。当時、日本において、「くれない族」が問題になってました。「くれない族」とは、子どもたちが「お母さん、これしてくれない？」「先生、これしてくれない？」受け身なんです。しかし、指導する立場になると 180 度逆転します。受け身から能動的に変わると、こういう効果が期待できます。

そして、実際にコーチング、コミュニケーション、コーディネーショントレーニングの 3 本柱で行いました。当時、最初は 3 日間 40 名ほどで実施していましたが、3 年目から市教委からの希望があり、市教委主催で引率教員を含め、市内全 82 中学校を対象に拡大し、今年の 8 月が最後になりました。来年度から部活動の地域移行が始まって、地域団体による「コベカツ」という新しい活動がスタートするからです。

「アジア次世代スポーツ（社会）科学フォーラム」は、日本、韓国等を対象に大体合計 40 名から 60 名くらいで韓国と日本の交互に開催しています。第 1 回はピョンチャン 2018 冬季オリンピックスケート会場の江陵で開催され、第 2 回は淡路島、以後交互に開催され、第 11 回はまた韓国にて開催されました。これは、教員や院生のオーラル発表に加え、学部生や院生もポスター発表を英語で行うというフォーラムです。

2017 年からは「ラグビーワールドカップ 2019 日本」、「東京 2020 オリンピック・パラリンピック」「ワールドマスターズゲームズ 2021 関西」の開催を前にして、神戸商工会議所の支援を受け、「神戸スポーツ産業懇話会」を設立しました。神戸は、アシックス、ダンロップスポーツなどのスポーツ産業、そしてヴィッセル神戸、INAC 神戸レオネッサ、神戸製鋼コベルコスティーラーズなど、数多くのスポーツ資源とレガシーに恵まれています。会長には、尾山アシックス CEO になっていただき、私は代表世話人に就任し、世話人会、例会参加型イベント、就業者スポーツ実施率調査、企業交流運動会振興、公開シンポジウム等を開催してきました。

7. 生涯スポーツの研究成果と課題【スライド pp.11-13】

ここからは、生涯スポーツ論のこれからと課題についてお話しします。このスライド（pp.11-13）は、東京に「スポーツ立国調査会」という組織があり、スポーツ議員連盟、スポーツ庁、スポーツ団体、スポーツ産業、学識経験者等によるプラットフォーム組織ですが、2017 年に小委員会が開催され、プレゼンテーションの内容を加筆修正しました。このプラットフォーム組織は、翌年に報告書をまとめ、部活動の地域移行を提言しました。スライドは 3 つあり、「More Sport！（もっとスポーツを！）」、「More Physical Activity！（もっと身体活動を！）」「More Enjoyment！（もっと楽しさを！）」としてまとめました。

(1) More Sport！（もっとスポーツを！）【スライド p.11】

スポーツの背景にあるのは、競技スポーツ人口の減少、市民体育大会参加者の減少、地方スポーツ行政の予算減、効率性/効果/経済、自治体間格差です。地方スポーツ行政の予算はようやく下げ止まり、今、右肩上がりに転じています。そして、地方スポーツ行政の一元化、地域スポーツプラットフォームの創設、スポーツ団体の統合・インクルージョンを提案しました。今現在、都道府県のほぼすべてが教育委員会から首長部局へ移行しています。市町村は、まだこれからです。

もう 1 つ、スポーツ団体の統合・インクルージョンですけれども、これは我が国ではまだ遅れています。ヨーロッパの研究をしてきましたけれども、完全にオリンピック・パラリンピックの競技が統合しているのは、ヨーロッパではオランダとノルウェーで、アメリカも 5 年ほど前に完全統合しています。日本ではまだ非常に少なく、ほとんどが分離しているという、こういう状況であります。

(2) More Physical Activity ! (もっと身体活動を!) 【スライド p.12】

2 枚目のスライドは「もっと身体活動を！」です。背景は、超高齢社会、中年期肥満、ストレス社会、ワークライフバランスです。ここでは、道路行政のガバナンス強化として、自転車レーン生活スタイルのイノベーション、ユニバーサルデザインを提案しました。

オランダに 3 カ月サバティカルで滞在し、オランダの道路行政を学びました。日本の道路交通法では、自転車は軽車両ですが、実際は右側/左側通行はバラバラで、大阪では自転車の信号無視が多く、自転車対歩行者の全国ワースト 1 位です。オランダの自転車活用とその効果、そして日本の問題点を示したものを SSF オンライン・コラムに掲載しました。この反応は非常に早く、来年の 4 月から自転車での「ながらスマホ」に対して罰金が課されるようになったのは嬉しいニュースでした。

生活スタイルのイノベーションですが、スライド右の真ん中の写真はオランダ・スポーツナレッジセンターのスタンディングデスクです。デスクは上下し、立って仕事をしたり、バランスボールに乗って仕事する人もいます。また、会議室も立って会議をするところもあり、議事進行が早くなるという高い効果があります。ユニバーサルデザインは、東京 2020 オリンピック・パラリンピックにより、東京のユニバーサルデザインが進みました。神戸にしあわせの村という総合運動公園と福祉施設があります。もし神戸に来ることがあれば、訪ねていただきたいと思います。

(3) More Enjoyment ! (もっと楽しさを!) 【スライド p.13】

「もっと楽しさを！」の背景は、少子化、若者のスポーツ離れ、ドロップアウトです。昨 2024 年の出生率はわずか 1.15 で、年間 68 万人の新生児しか生まれませんでした。これまでのピークはベビーブームとして 270 万人も生まれていましたので、非常に深刻です。ここでは、クラブライフ・ファミリースポーツ、新たな連携を生むスポーツ Plus、スポーツツーリズムを提案しました。

最近インバウンド・ツーリストが増えてますが、北海道や長野のスキー客や富士山登山などのスポーツ率が着実に伸びています。ただ、ニセコは外国人の季節就業者が増えた結果、物価がインバウンド価格に高騰しています。また、地域住民とのトラブルなど観光公害も目立っています。観光事業に取り組む際は、多言語化やルール作りの厳格化が求められるかと思います。

「ラグビーワールドカップ 2019 日本」のインバウンド・ツーリストは 3～4 週間の長期滞在者が多かったです。しかし、彼らがゴルフをしたくても、日本のゴルフ場にはレンタルクラブが置いてないんです。最近、新幹線の新神戸駅に「トレイルステーション神戸」がオープンしました。登山用レンタル、手荷物預かり、グッズ販売、着替えスペース、イベント等のサービスがあり好評です。

(4)第 26 回 TAFISA ワールド कांग्रेस 2019 東京 (スライド p.14)

これは、パスしたいと思います。 कांग्रेसのサブテーマが重要なんです。これからのスポーツ研究のテーマとして、メインテーマは「スポーツ・フォー・オール～伝統と革新～」ですけれども、この 5 つのサブテーマも重要かと思います。

(5)Active Life, Active Cities (スライド p.15)

時間の制約からここもパスします。

(6) 新しい生活様式における身体活動 (スライド p.16)

ここでは 2 点に焦点を当ててお話しします。我が国の生涯スポーツ政策が遅れた 1 つの原因は、縦割り行政の弊害です。それゆえ、「連携と協働」が求められます。

私はスポーツ基本法の第 7 条を評価しています。それは、国、地方自治体、学校、スポーツ団体、スポーツ事業者等は、基本理念の実現を図るため、相互に連携を図りながら協働するよう努めなければならないとしています。この第 7 条は、非常に大きな影響が出てきて、地域や広域、そして国レベルにおいて、生涯スポーツの推進に大きな影響がありました。

最後に、「生涯スポーツの研究のこれから」、すなわち生涯スポーツ社会の実現に向けた研究課題を 3 点に絞ってお話しします。第 1 点は、少子高齢化、人口減少社会という社会課題に対して、スポーツは何ができるかを実証的にアプローチすることです。例えば、子どものスポーツ実施に対して、促進要因と阻害要因は何か、また、シニアのエイジングに向けて何が効果的か、そして多文化・多民族の統合や受容にどのようなスポーツが貢献するのかなどが挙げられます。

第 2 点は、気候変動や DX 化の遅れに対して、スポーツ研究は何をすべきかということです。日本は近年、気候変動により、ほぼ亜熱帯になり、夏季は猛暑、酷暑の温暖化が 3 ヶ月も続きます。また、地震・災害やゲリラ豪雨が常態化しています。こういった気候変動に対して、安全・安心・効果的なスポーツ実施の条件整備に向けた研究が求められます。この

テーマは社会学だけではなく、学際研究、すなわちマルチ・ディシプリナリーな研究プロジェクトが必要です。

また、スポーツ情報は文献情報だけでなく、アリーナ、スタジアムなどの施設、用具、クラブハウスなどのハードウェア情報のデータベース化が必要です。さらに、映像や写真、ゲーム分析などのソフトウェア、アスリート、コーチ、ドクターやトレーナー、栄養士、カウンセラー、ジャーナリストを含めたスポーツ人材の情報データベースからのアクセス方法の開発が求められます。

第3点は、量的研究と質的研究の混合法という研究法の質的向上とフィールドワークの重要性です。現在スポーツ庁が実施しているスポーツ実施調査は、残念ながら調査項目の尺度や選択において、妥当性と整合性に課題があります。質的研究と量的研究は、それぞれの立場を守るために批判しあうのではなく、対象による強みと弱みを明確にし、両者を活用した混合法の活用も求められます。スポーツは人間の行為によるものであり、スポーツの魅力や躍動感・感動はスポーツ現場における相互作用から生まれていることによるので、スポーツのフィールドワークの重要性とその価値を強調したいと思います。

以上で、「生涯スポーツ論研究のこれまでとこれから」を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【フリーディスカッション】

清水：山口先生、ありがとうございました。地域に基盤をおいて政策を考え、しかも非常に重要な数々の委員会で取りまとめ役をやりながら研究をしてこられました。特に、2000年以降の政策において、山口先生がそれまで関わってきた経験が活かされながら、「スポーツ基本計画」ほか、様々な政策の骨子、基盤となるとところをつくられてきたことが非常によくわかりました。それらは、やはり生涯スポーツ論、スポーツ・フォー・オールというところから、先生が大学・大学院、そしてその後に研究されてきたというのが、非常に生きてきたのだというのがよくわかりました。ありがとうございました。

それでは、本日お聞きの皆さんから、山口先生の講義について、ご質問あるいはご意見等ありましたらお願いします。お名前、所属を言っていただければ幸いです。いかがでしょうか。どなたからでも結構ですのでお願いします。

清水：清水さん、どうぞ。

清水克郎：鹿屋体育大学から神戸大学に移って、震災にあわれたとのこと。鹿屋体育大学ではやはり今の体育・スポーツでは最先端の教育をされていると思いますが、神戸大学に移られてからスポーツ教育、教育ということに関して、神戸大学に移ってからの連続性というのはどういうふうになったのかということをお伺いしたいと思います。

山口：鹿屋体育大学からの連続性というふうに考えると、鹿屋にいる時に、スポーツイベン

トのフィールドワークを始めました。これ（スライド p.6）は「指宿菜の花マラソン」です。で、同じ講座の 3 人で、経営者調査、それからランナー調査、そして私はボランティア調査に分かれて、現地で直接調査票を持って行って、経営者に対して、あるいはランナーに対して、それからボランティアに対して、そこでデータを集めていきました。

これは初めての試みでしたけれども、やはりフィールドワークは非常に重要だということを学びました。その後も神戸大学のゼミで何をしようかなって思っていました。ちょうど神戸大学に移った時に、神吉先生という加古川が大好きな先生がいらっしゃって、加古川でウォーキングイベントが行われていましたので、今度はウォーキングイベントに学生を連れて行って 10 年間サポートしました。

毎回、イベント参加者の評価が低いことと良かったことを報告書にまとめて、それを事務局に出しました。例えば、加古川に行った最初はですね、トイレに対する不満が非常に多かったんです。どうしてかという、仮設トイレが多くなかったんです。ただ、仮設トイレを多くするってことは、実はコストがすごいかかるんです。で、翌年行ったら、改善されてまして、なんとコースの途中に加古川市内の 1 つの小学校を使っているんです。小学校のトイレを使うようにと。いわゆる調査によって課題が解決されていきました。ですから、こういうふうなスタンスは、鹿屋体育大学から神戸大学に移っても毎年続けていきました。

10 年続けた後は、ずっと沖縄のスポーツイベントに行っていました。最初はフルマラソンの「沖縄マラソン」をやってくれという依頼があったんですけど、大学院の入試と引っかかっていたんで、尚巴志ハーフマラソンから入って、その後は名護市のウォーキングイベント。それから日本ハムファイターズが名護でキャンプをしていたので、日ハムの応援に来ている観客の調査、そして最後は「ツール・ド・沖縄」、自転車調査です。調査も参加型にしていたので、学生も私も全員自転車に乗って、40km 走ってから翌日に参加者の調査をする。こういうことが継続して、ずっと一貫して鹿屋から神戸に続いていたということが言えるのではないかなと思います。

清水：よろしいでしょうか。清水さん、いかがでしょう。

清水克郎：鹿屋体育大学から神戸大学に移られて、その後スポーツの教育の中で、どういうふうに山口先生が活動されていたのかということですが、やはり引き継がれて、イベントの調査、フィールドワークをしていたということなのですね。

山口：はい。

清水：清水さんよろしいですかね。ありがとうございました。そのほか、いかがでしょうか。はい、どうぞ中山さんお願いいたします。

中山：どうもありがとうございます。スポーツ庁の中山といいます。貴重なお話ありがとうございました。私、今ちょうど「体力・運動能力調査」と「スポーツ実施率調査」の担当をしております、ぜひ先生にお伺いしたいと思うのが、両方ともですね、先生が関わっているということです、「体力・運動能力調査」に対する今後の期待というか、もっとこうした方がいいよということも含めてお伺いしたいです。先ほど、実施率調査はちょっと今いい方向に行っていないなというところもあったと思いますので、そこをぜひ今後参考にさせていただきたいので、どういうふうに行ったらいいのかというところも含めてお話しただけですと幸いです。

山口：スポーツ庁から参加されてると思っていませんでした。ありがとうございます。「スポーツ実施調査」の前は「体力・スポーツに関する世論調査」がありましたよね。あれが3年に1回でしたか。そんな感じでずっと行われていましたが、それだけでは問題があるなというふうに考えていて。特に、実施率のところが、週1回とかそれだけだったので、やるべきだというふうに考えていました。文科省の「スポーツ実施率調査」には、私は直接関わっていません。それでずっと見てて感じたのは、調査項目が変わっていききましたよね。実施率が伸びないと実施種目に「階段昇降」が入ったりしているので、そんなに変えるべきではないんです。スタートの時に、もう少しいろいろな専門家も入って、集約し、継続して使えるようなスタンスでいくべきではなかったかなと思います。

それから、かなりいろいろ詳細なところで結果が出たと思うと、がらっと変わったりとか。やっぱりあんまり変わるべきではないなと思ってのんです。特にその辺のところをやっぱり考えていただきたい。外部の人でも1回入れて、で、社会調査専門の人もおりますので、そういった人も入ってもらいながら、そしてやはり基本的なところは変わらないというようなところ。そういったところを、例えばスポーツの実施頻度だけでなく、今度は強度と時間みたいなものを入れていく。これはSSFの「スポーツ・ライフデータ」がありますが、私はこれをやる時に関わっていたので、「カナダの全国調査はこんなことやってるよ」という情報を月刊誌に出していました。その結果、枠組みが作られたので、そういったことが必要かなと思います。また、質問にはダブルバーレルが見られるものもあります。

中山：ありがとうございます。今の状況としましては、まさに今、先生がおっしゃった時間のところは、我々が今ちょうど検討しているところでございまして、このままいけば、令和7年度にその時間の調査をどういう形で行うかというのはまだ検討中ですけど、行うというところです。あと3年前からですね、先生おっしゃるような有識者の先生の御意見を伺わずにというか、そういう状況があったので、一昨年度から有識者の先生を踏まえまして、それで検討委員会をやって、項目を変えて、考えて検討していくというところで実施しております。また、御意見いただければと思いますので、よろしくいたします。

清水：中山さん、ありがとうございました。山口先生、やっぱりこのフィールドワークのところですね。先生も最後に質的なところと量的なところをうまく混じり合わせるということが非常に重要だというふうに言われていたわけですが、先生がフィールドに入ってスポーツイベントに参加しながら、そのフィールドで何が重要なのか、そういうところをやっぱり感覚的にも、あるいは理論をベースにしながら質問項目を考えるとと思うのですが、フィールドワークの重要な点や醍醐味というところを少し大学院生にお話いただけるとありがたいと思います。いかがでしょうか。

山口：はい、ありがとうございます。スポーツというのは、やはり AI ではできませんので、現場でスポーツをする人間がいて、それが集まるとイベントになるし、運営する人もマネジメントする人もいる、観戦する人もいる、いろんなスポーツに関わる人が全部集まってくるという、これがスポーツイベントなんですよ。

それが今また注目されてるのは、そのスポーツイベントを契機にして、地域おこしといいますか、まちづくりにつながっているところも重要ではないかと思います。私が最初にまとめた本は 1996 年に『生涯スポーツとイベントの社会学：スポーツによるまちおこし』というのを書いてます。これは学会でスポーツイベントに関する発表をしていたら、大修館書店の『体育科教育』の編集の方から依頼があって、最初は「6 ヶ月やってくれないか」と言われました。で、6 回書いたら「もうちょっとやってくれへんか」ということで、1 年延びて、結局 2 年やったんですよ。そうすると、2 年やると、本になるんです。

いっぺんに本を書くのはなかなか時間がないんです。その頃ちょうど、右膝の前十字靱帯を切って 1 カ月入院したことが出版に繋がりました。翌年、今度は左のアキレス腱を切って、またもう 1 冊書けたという怪我の功名みたいなこともありました。

あとはですね、スポーツイベントの調査は、キーパーソンが運営者側にはいますので、そのキーパーソンとコミュニケーションをつくっていく。当日は、非常に忙しいんですけど、なんとかその人からいろいろなポイントをしゃべってもらう。こういうことも重要になります。

それから、イベント調査の参加者はマラソンランナーですけども、参加者の声を聞かないといけません。ですので、調査票の項目が増えるともうくたくたで書いてくれないんです。ですから、簡潔に一番必要なところに自由記述を必ず最後にひとつ入れるようにしました。キーワードだけでもかまわないっていうふうにしたこともありました。

最近はまだ、WEB 調査に変わりましたので、神戸マラソンも 3 年ぐらい前から、QR コードによる WEB 調査と現地調査の両方にしました。まずマラソンやウォーキング等の現地調査においては、調査する場所がポイントなんです。フィニッシュ地点でのイスとテーブルの配置場所です。例えば、ウォーキングとかランニングとかいろいろな人が参加してますが、フィニッシュした後の導線の上で調査票を書いてもらうようなセッティングをするんです。そこに学生がいて、うまく誘導してお願いすると。こういうセッティングのノウハウ

も重要になってきます。それともう1つ、クタクタの人もいますので、大きなQRコードを貼っておいて、コピーしてもらって、帰りがけとか、家に帰ってからとか、書いてもらうようにしてます。これをやったら、回収数がびっくりするぐらい多くなりました。ですので、多いということは、ランナーやウォーカーは「こういうところを改善してほしい」というのと、もう1つは、逆に「こういうところが良かった」という意見がいっぱい出ます。

それで考案したのが、自由記述として書いてもらった文章を1行に短くするんです。「一行完結法」にしてもらって、男性、20代とか、女性、30代と、入れてます。その後はKJ法です。カードにしておいて、バツと広げる、学生が集まりデータを集めていって、分類していきました。分類していただけたんですけど、そういうふうに行っていると分けることができ、「満足群」と「不満群」とに分けることができました。ですから、1枚の図式にまとめるということが重要なんです。「満足群」のところに上に置く、「不満群」を下に置く。

「こんなふうにしてほしい」という要望群を右側に置いて、図式化しました。さらに最終的に「満足群」のところに今度は数によって、一番多いのを左端にして順番に並べていきました。そして、「不満群」も左から一番多いのにしてずっと減らしていきます。そうするともう圧倒的に満足が多くて、不満はこういうポイントだというのがわかります。例えば、「神戸マラソン」の場合、コースの最後に4kmぐらい橋を登って行って、人工島に降りるという、これやっぱ不満なところが最初からありました。こんな構造がはっきりわかりますので、単にパーセントの数字だけではなくて、自由記述に書いたものを一行簡潔にして、さらにそれを分類してKJ法を図式化していくという方式がやっているうちにできました。それを見ると、不満が多いところは、イベントによって違いますので、これはまだ課題があるなというのもわかりますし、こういう希望もあるなっていうのもわかります。ですから数量的なデータだけでなく、自由記述をうまく整理して分類していくことによって、両方の混合法というものが何とかできるようになったかなと思ってます。いろいろな調査において、それでやっていますので、その1枚の図式を見せれば、もう全部わかるという、これが大事なことかなと思います。それはフィールドワークとゼミの集計で学んだところかなと思ってます。

清水：ありがとうございます。大変よくわかったことと思います。調査するのも、研究倫理を通すのもなかなか大変になってきましたね。皆様いかがでしょうか。はい、高峰先生どうぞ。

高峰：高峰です。山口先生、ありがとうございます。山口先生は昔から多変量解析等々をやられてきたお一人ですが、先生のお話の中では量的な方法論のみならず、フィールドワークやテキスト分析等々、いろいろな方法論をとられてきたことがわかりました。もし院生や若い研究者にアドバイスをするとき、いろいろな研究手法を身につけるよう伝えた方がよいのでしょうか、それとも、若い頃は1つ研究方法に絞って、それを洗練させていくよう伝え

た方がよいのでしょうか。多くの院生さんを育ててこられたご経験から、何かアドバイスがあればいただきたいと思います。

山口：はい、ありがとうございます。院生の若い頃に1つに絞ってやるのがいいかどうか、といえますか、まあこれしかないと思ったらそこに行くと思いますけれども。

むしろ、私はスポーツ社会学、体育・スポーツ社会学では、やっぱりデータ、基本的なデータからは離れられない。というか、それが1つのアピールポイントになる。「これだけの人がサポートしてますよ」「満足しましたよ」と言うこと。私は基本的な、ベースとなるのは、量的なスポーツ調査ではないかなと思っています。で、そういったところから、これをベースにしておいて、対象によっては質的な分析の方が遥かによく分かることがありますし、あるいはそのトライアングレーション（混合法）でいろいろなものを取り取ることができるのもあります。大事なのは、普段から、いろいろなスポーツ現象について、問題意識を持つということではないかなと思っています。

今日、最初に世界陸上の話をしましたが、中島ジョセフでしたか、ハーフのアスリートがものすごく多いと今回感じませんでしたか。私は、もうケーススタディ、質的研究のインタビューしかないかなと思っています。こういうものを集めながら、特に、スポーツから離れますけれども、政治の世界でインバウンド対策とか、インバウンドのいろんな軋轢などがたくさん出ています。大阪ではもう民泊がものすごい問題になっていまして、特例の民泊のうちの90数パーセントが大阪なのですが、ルールを見ると管理者は常駐しなくていいんですね。そんなことがあったりして、オーナー権はアジア、例えば中国から来ている人が持っている。それで、結局宿泊している人は夜遅くまでうるさい。それからゴミも出しっ放し、ルールをちゃんと守らないというような。いろいろな軋轢があります。政治の世界、世論のところでも問題はあります。ただ、関東にも多いと思いますけど、いろいろなところにおいて、スポーツを通してうまくコミュニケーションができるということにもいい効果があるのではないかなと思ったりします。

というのは、ドイツは連邦国家ですので、内務省がスポーツの管轄をしています。一時期、2000年の初めから10年ぐらいにかけて、スポーツクラブに移民の子どもをいっぱい入れるんです。そういうところに入れておいて、小さい頃から、日常的なコミュニケーションできるようにしておく。そういうふうにしておくと、大人になったから問題が少ないと。こういう問題がありましたので、いろいろな統合とか受容などの課題を明らかにしていくという点で、量的な問題よりもっと質的な、あるいはフィールドに行ってやるということが重要だと思います。いろいろなところにいっぱい研究テーマがあると思いますので、そんなところに若い人には関心を持ってほしいかなと思っています。以上です。

高峰：ありがとうございます。今のことに関して、もう少しだけ伺いたいのですけれども、最後の方に「生涯スポーツ学構想」というスライド（p.18）がありますね。そこについての

お話しの中で学際研究ということも提案されておりました。例えば方法論に関しても、量的調査を専門とする人、質的調査を専門とする人たちが一緒に調査研究を行ったり、あるいは社会科学と自然科学、そして実践科学等々を専門にする人たちが集う方法として、何か具体的なアイデアや構想みたいなものがあるようでしたら、紹介していただきたいと思います。

山口：はい、ありがとうございます。こちらですね（スライド p.18）。これは、2023 年に日本生涯スポーツ学会が 25 周年を迎えて、鹿屋体育大学のシンポジウムで、「生涯スポーツ学に関するこれから」といったテーマのシンポジウムがありました。私もコーディネーターを務めさせてもらって、この日本生涯スポーツ学会は、社会科学だけではなくて、自然科学、実践科学の人もいます。ここで議論したことを短報として早く出した方がいいと思ってまとめたものです。

ここで書いてある学際研究ですけれども、80 年代、90 年代に北米において随分議論されました。最初はね、インターディシプリナリー・アプローチだったんです。インターディシプリナリー(interdisciplinary)ということは、それぞれの専門分野を横串にして一緒に統合してやりましょうという。こういうことがやられたのですけれども、残念ながら専門用語がうまく相互に理解できない。例えば、運動生理の「何とか閾値」とかよく分からないということで、実際はその学際研究のインターディシプリナリーは難しいのではないかという議論がありました。その後に出てきたのがマルチディシプリナリー(multidisciplinary)・アプローチです。マルチというのは 2 つ以上です。2 つ以上の専門分野が知識を持ち寄って、1 つのテーマに対して追求していこうというアプローチです。実は、最初に鹿屋体育大学でそれを経験しました。最初にできたきっかけは公開講座で、高齢者にスポーツを普及するためには科学的知識を提供し、実際に新しいスポーツを体験してもらうという考えで公開講座「高齢者のスポーツ」をやりました。その時に、運動生理、スポーツ心理学、スポーツ社会学やマネジメントの専門家が集まり議論したのですが、やっぱりインターディシプリナリーは無理だっていうのがわかりました。それで「マルチ」にして、じゃあそれぞれの立場から何ができるのか、効果的なプログラムは何か、心理学的なアプローチもしてもらおうという、協働機会が生まれたのを覚えています。

ですので、学際研究をやろうとすると、おそらく体育・スポーツ社会学がリーダーシップをとって、日本体育・スポーツ・健康学会の方に提案して、科研費などに応募して、そこでうまくまとめるのはやっぱり社会学がうまいんですよね。社会学者の人がそのリーダーになって、それぞれの立場でやってもらってまとめる。特に、最後にお話ししました「気候変動」とか、「安全・安心・効果」というのは、社会学だけの問題ではありません。「熱中症アラート」をどういうふうに活用するのか。これも今、都道府県で出ていますよね。1 つの地域でアラートが出たら、全県に出てしまっています。豊岡と神戸なんかは、ずいぶん違うんです。豊岡は、ものすごく蒸し暑いところなので、もっとその地域に応じた暑さ指数みたいなものを出すべきだと思いますし、こういったところを日本体育・スポーツ・健康学会で提

案してもらって、プロジェクトを作ってやってもらおうと、これからの課題がいろいろと出てくるのではないかと考えています。あと、生涯スポーツ学もこれから出てくると思います。2023年のシンポジウムの後に、中京大学の伊藤央二さんが生涯スポーツ学に向けてについての論文を学会誌に出しておられましたので、これから進んでいくのではないかなと思っています。以上です。ありがとうございます。

高峰：具体的なお提案をいただきまして、参考になります。ありがとうございました。

清水：そのほか、いかがでしょうか。はい、阿部さんお願いします。

阿部：山口先生、始めまして。大正大学の阿部と申します。本日、山口先生ご自身の経歴をかなり詳細にお話しただいて、当時のお話をこうして体系的に聞ける機会もなく、学説だったり、生涯スポーツ学の構想ができあがってくるまでの経緯までについてもお話を聞くことができ、大変勉強になりました。ありがとうございました。

私がお聞きしたいのは、先程高峰先生のご質問とも若干関連があると思うのですが、ご自身がいわゆるアカデミアとしてトレーニングを受けてこられたような話と同時に、これまで研究者養成の立場でいろいろな研究者を輩出されてきたり、また今現在進行中の後輩の研究者の育成に携わっておられると思うのですが、今現在のお立場で、これまで指導するにあたって、何かすごく気にかけてきたことですか、やはりこのポイントは伝えてきたことですか、そういったお考えがもしあれば、少しお聞きしたいなというふうに思いました。よろしくお願いいたします。

山口：院生の指導に関係することかと思いますが、神戸大学に移って、院生もだんだん増えてきて、50歳になった時に他の大学の非常勤講師を辞めました。それから集中講義には行ったことがありましたけれども、毎週行くのはやめました。自分の研究と地元、そして全国レベルと国際レベルの3つがあったので、時間配分として、もう非常勤はやめて、院生指導に当てることにしました。特に、大学院博士課程は大変なんです。神戸大学にいたときに、9人に博士の学位を出しました。そして、最後にちょっと残って、大体10人ぐらいかと思うんですけど、また修士も21人ぐらいいたと思います。よく言っていたのは、例えば仮説を立ててデータ分析をして、棄却域を5%にするとした時に、カイ2乗検定でも何でも、それが5%にいかないと、7、8%ぐらいになったら、有意差が出る。こういう誘惑があるんですけど、この誘惑に負けてはいけません。有意差があるからいいのではなくて、有意差がなくてもそれは意味があるんだと。結局、研究対象に対して方法論をしっかり示しておれば、こういう対象をこういう研究でやって分析し仮説を支持されなかった。これでも十分大丈夫なので、そこを誘惑によって数字をごまかさないようにと。これ研究倫理のことですけども、よく言っていたと思います。

それからもう1つ。やっぱりフィールドワークが重要だと思いましたので、よく言っていたのはアームチェア・スカラーになるなど言っていました。肘掛け椅子に座ってパイプをくゆらせて、研究をしているというのではなくて、現場にいて、いろいろな人と会って、いろいろ見て、聞いて、感じて、そういうフィールドワークが大事だよということを言っていました。

そして、3つ目ですが、論文執筆というのは大変です。学会発表はよくやる人がいます。私も学会発表をよくやったのですが、忙しくてそのあとペーパーまでなかなか到達できないんです。やはり大事なものはペーパーにすることです。学会発表というのは、その場に来ている人と共感を得られたり、いろいろなコミュニケーションができるわけですがけれども、やっぱり一過性なので、ペーパーにして初めて、その論文が次の世代にずっと残っていくわけです。ですので、原著論文でなくて、研究資料でもいいし、短報でもいいので、とにかく何でも書いて出すことが大事だと、そういうことを言ってきたかな。

なかなか論文執筆ですけど、ぜひ皆さんにもトライしてほしいと思います。そして、一時期、生涯スポーツ学会の理事会で話したことがあります。編集委員会で、レフェリーを外注するのが多かったのですが、学会員以外のアウトソーシングというのは、その分野の専門的な人がいる場合に、よくアウトソーシングしてたんです。その人たちが世界的なレベルの人だと審査基準が高いので、厳しくなるんです。院生のものも、だめだったらだめで、評価が低くなるんです。私のスタンスはそんなに厳しくしなくても、まあまあこのくらいだったらいいんじゃないかなと。査読はあまり厳しくしすぎない方がいいんじゃないかなと思っています。このことをスポーツ社会学会の初代会長の井上俊先生とも話したことがあるんですが、井上先生も同じ立場なんです。ちょっと議論するところがあっても投稿して、査読を見ることによって、もっと議論が深まって、いいものができるよということなんで。やはり、ペーパーの執筆を大事にすること。できるだけ書いて、そして何回か書いてるとね、だんだん書き方がわかるんです。そうして、例えば序論のところの枕は、全体的なところから入って問題提起をして、そこでこれまでどんなことが行われているか、何が足りないのかというのを書いていきながら、自分の研究目的につなげていくわけですよ。やっているうちに、だんだん書き方がわかりますので。ぜひ書くということです。

それから、もう1つ、投稿する前に同じ分野の先生などにチェックしてもらってください。北米もヨーロッパもそうですけど、査読が来たら無料でちゃんとやるっていうのが研究者の義務なんです。必ずやります。結構、ちゃんとやってくれる先生も多くて、私も来た時は必ずしっかり見て、「ここはこうだ」と指摘します。

もう1つルールがあって、ほかの先生に見てもらったら、必ず最後の論文のところで謝辞を入れるということです。ここの大学の先生に、論文のチェックをしていただきました、ありがとうございますという。これがルールなんです、マナーなんです。ですから、大学に入ると、その指導教官と院生だけの関係になるので、もっとほかの関連の人にも出したり、オープンにやってもいいんじゃないかなと思います。以上です、ありがとうございます。

阿部：大変示唆深いといえますか、私自身も身に染みるころがございます。ありがとうございます。もし、よろしければ、逆に失敗したというか、「これはこう思ったんだけど、やった結果、これはあんまりよくなかった」と思うようなことがあれば、1つ、2つお聞きできたらと思うんですけど、いかがでしょうか。

山口：失敗ですか。もう失敗ばかりでね、いっぱいあるんですけども。でも、やっぱり振り返るっていうのは大事なことだと思います、普段から。自分が割と大きなところでの機会を与えてもらって、講演したりとか、今日もそうですけども、自己評価することになっています。「+（プラス）」、「-（マイナス）」、「±（プラスマイナス）」とか、その日の手帳のどこにこれを書いときます。そうすると、これが「何でだめだったのかな」というのがわかるので、私の場合、一番多いのは、こういう話をしている時に余談が多いんです。多いというか、脱線していくんですね。そして、聞いている人は「それが面白い」と言う人もいますけれども、余談が過ぎると結局時間がなくなってしまうんです。今日もいくつかカットしましたけど。ですから、今日のレクチャーは珍しくシナリオを作りました。普段の授業、学生の授業の時には作らないんですけども、やっぱり大事な時はシナリオを作る。そうすると、体系的な話ができます。そして、終わってから、何が良くて何がダメだったか、「+」と「-」で自己評価をして、そういったところを繰り返さないようにします。普段は小さな失敗でいっぱいになるので、大きな失敗はできるだけしないよう、特に重要な選択で間違わないことが大切かなと思います。

阿部：ご丁寧にありがとうございました。

山口：はい、ありがとうございました。

清水：阿部さん、よろしいですか。そのほか、いかがでしょうか。はい、南方さん、お願いします。

南方：山梨学院大学の南方と申します。山口先生、今日は貴重なお話をありがとうございました。私も結構、フィールドに出ることが多くてですね、現在はあるプロ野球の球団と野球の普及振興活動に関する共同調査を実施しております。先生のおっしゃるように、参加者に対するアンケート調査では、直接、対面で手渡しして、いろいろな調査しているんですけども、やはり自由記述はあまり書いてくれなくて、選択のところだけ書いてくれるとか。あとは、今、保護者と子どもの両方に対して調査を行って、その比較分析を行っているんですけども、なかなか難航している部分もあります。先生がフィールド調査を実施されてきた中で、子どもだとかなかなか調査がしにくい、難航した時の事例と、その克服方法ですとか、あと

はその調査結果をやはり社会に還元するというのがすごく大事だと思っていて、社会に還元する際の留意点などがあれば、ご教示いただきたいと思って発言させていただきました。よろしくお願いいたします。

山口：はい、ありがとうございます。実はそうですね、子どもの調査はあまりやってないんです。鹿屋にいた時、大学に行く際、いつも同じところで同じ人がゲートボールしていたので、「ああ、これは面白いな」と思って高齢者の研究をしてきました。私が逆に、シニアになったら、子どもは対象にしたいなというのはずっとありました。それで、2011年から、神戸ジュニアスポーツリーダー講習会で、中学2年生を対象にした講習会をスタートしました。この時に、6人のプロジェクトメンバーでやったんですけども、社会科学が3人で、ほかにトレーニングとか、それからスポーツ栄養学。チームビルディングの人も一緒にやりながら、いろいろな人が一緒になって、1つのプロジェクトに関わったというのは、非常にいい経験になりました。

もう1つは、こういうプロジェクトの時には、たいていスポーツ協会とかスポーツ団体の講習会行って帰るだけでしょう。自分のコマがあったら、講義をして帰るだけですけども、私がやってきたのは、その最初から最後まで全部行って、もちろん別に仕事があったら「どうぞご自由に」ですけど、原則はずっと一緒に見てもらって、意見を言ってもらったりとか、お互いの良さを見てきたということで、子どもを対象にしたリーダー講習会によって、すごくいい経験をしました。

子どもを対象にした調査では、尺度を入れる際に、文字だけではなくて図式化することがポイントです。1つは「スマイルマーク」で、満足／不満足とか、ちょっと顔を苦しそうな絵を入れると、分かりやすくなり、調査の中で満足してくれたというようなことがあったのを覚えています。ですから、あまり文字にこだわらないということも大事かと思います。

それと、母親と子どもを調査する際に、同じ質問項目に対して、ズレはないかという視点も大事かなと思います。まったくズレがなければ、同じ方向を向いているということなんですけれども、親の方が過剰に期待し過ぎているというようなことが分かるためには、同じ尺度を作らないといけないということがあります。子どもへの調査は、中学生ぐらいまでしか担当していないので、そのぐらいかと思います。

もう1つは、フィールドワークの研究成果の社会還元、これ重要なテーマだと思います。どうしてかというと、社会調査をする、お願いしてデータが出てくるので、そのままやりっぱなしにするというのが一番まずいんです。終わったら、結果を示してもらった人にちゃんと送っていればいいんですけど、これをしなかったら、今度来た時に、もうやってくれなくなるんですね。ですから、必ずわかりやすい資料にして、そこに送っていく。あるいは持って行って、「こんなことが出てましたよ」というと、関係ができて、次の年もやってくれます。そうすると、ワンショット・サーベイではなくて、縦断的な、時系列の調査ができますので、そういうアプローチもありかなと思います。

そして、もう1つは報告書です。いろいろなイベントを調査して、報告書を出しましたが、あれども、あんまり細かいデータ、たくさんの数値の変化ばかりを出すのではなくて、要約みたいなものをびっしり書く。2ページだけ、バシッとそこでおさえてしまう。あるいは先程、清水先生（司会）の質問のところで話しましたが、自由記述を1つのモデルにすると、簡潔に短く、分かりやすくしたものを作る。あまり細かい数値のデータについて「ああだ、こうだ」とやっても、あんまり読んでくれません。ですから、ページ数はコンパクトにして出す。

それともう1つ、今思い出したのは、イギリスのスポーツカウンスルがやっているスポーツ実施率の報告書なんか、全部で11ページに収めてしまっています。質問項目を挙げ、1ページの中に主要な研究結果を上を書いて、例えばクロス集計でクロスの違いなどを入れて、1ページに全部入れ込んでしまう。表1、表2、表3と、ずっと長い報告書を書くのではなくて、短くすることによって、協力してくれた方に結果を返したときに分かりやすい。そのイベント担当者とか、行政担当者の方にとっても分かりやすいので、「ここを改善すればいいんだ」ということが分かります。分かりやすく簡潔に、図式化したような報告書を作るということが社会還元につながっていくのかなと思います。

幸い神戸マラソンは、最初からずっと関わらせてもらっていて、全体の実行委員会のメンバーでもありましたので、その時に「1番のポイントはこれです」とって話をしたりすると、すぐぱっと改善してもらえるんです。だから、そういう大きな委員会に入れていただくのであれば、大事なところだけをポイントを作って分かりやすく淡々と説明するということが、いわゆるステークホルダーを増やす、賛同者を増やすということにつながっていくのではないかと思います。

思い出しましたが、こういうマラソンの場合は、やっぱり終わってから、すぐシャワーとかそういうものがなくて、汗べたべたで帰らないといけないということがあって、「こんな課題が出てます」と言ったら、なんと神戸の銭湯組合の方から提案が出てきて、ゼッケン持って行ったら無料で入れてくれると。こんなことも出てきます。

いろいろなことがあって、途中、垂水、須磨とか海岸を走るんですけども、これは実行委員会の事務局の方がいて、「こんなんやるんで、ぜひ協力してほしい」と言って漁協の人に頼んだら、「以前、関空反対でやったことあるわ」と言って、大漁旗を持ってきてくれてね。みんなが走っているところで、旗振ってくれるんです。海岸ペリを走るコースがあんまりないので、いろいろなステークホルダーを増やしていくために、直接行って話をする。「こういうことがありましたよ」ということで、ネットワークを広げていくというのが、社会貢献につながっていくのではないかなと思います。

南方：貴重なご意見ありがとうございました。今後の活動に参加参考にさせていただきます。

清水：南方さん、ありがとうございました。そのほか、いかがでしょうか。そろそろ時間がなくなってきましたが、工藤さんどうぞ。

工藤：武庫川女子大学の工藤です。山口先生、今日はありがとうございました。日本生涯スポーツ学会の宣伝もしていただき、ありがとうございました。今年は「忘れ去られた生涯スポーツ」という刺激的なタイトルで、山口先生と先ほどのスポーツ庁の中山様にもご登壇いただきながら、11 月末に学会があります。皆様、もしご興味がありましたらご参加いただければと思います。

山口先生、ちょうど今スライド (p.18) に出ています「生涯スポーツ学構想」ということと、先ほど中京大学の伊藤央二先生の論文 (伊藤央二 (2024) 生涯スポーツ学の体系化を目指して：余暇・レジャー学における研究アプローチの類型からみた生涯スポーツ研究の動向．生涯スポーツ学研究 20(2): 1 15.) で、生涯スポーツを学問として体系化していくというお話がありました。海外では「スポーツ・フォー・オール」というムーブメントとしてよく聞くんですけども、アカデミックとか、あるいは研究のカテゴリーとして生涯スポーツというのがきちっと成り立っているというのを意外と聞いたことがありません。山口先生のご存知の範囲で、「スポーツ・フォー・オール」や「生涯スポーツ」という概念が体系化されているとか、あるいはその大学で学ばれているとか、研究領域として取り扱われているとか、そういったものがもしあるのであれば教えていただければ、今後すごく日本でも参考になるかなと思うんですが、いかがでしょうか。

山口：はい、ありがとうございます。例えば国際スポーツ社会学会に行っても、あまり「スポーツ・フォー・オール」というテーマがなかったりします。私たちのこととか、いろいろ発表したこともありますけども、それほど多くはないかと思います。体系化されているのは 1 つ、動きがあるのは確かマスターコースを作ろうという提案もしたことがあるんです。これは「FIFA マスター」に刺激されたんですけど、なんとか作れないかなということで、一回トルコで作ろうとしたんですけどポシャりました。

ドイツのライプツィヒ大学の中に TAFISA が「スポーツ・フォー・オール」というテーマで準備がされていました。実は、私に対しても講師として参加してくれないかと言われたんですけど、ちょっと目に持病を持っていたりして、時々視界が飛ぶことがあったりするので辞退しました。今日は大丈夫です。

TAFISA のライプツィヒ大学スポーツ・フォー・オールのマネジメントなどの他に、TAFISA は認定指導者講習会として、「CLC: Certified Leadership Course」があります。これは 20 年ほど前からやっています。私も CLC 講師に呼ばれて、マレーシア、インドネシア、台湾、香港、イランで講義をしました。イランは、なかなかエキサイティングな国でしたが、指導者養成としての内容は、「スポーツ・フォー・オール」の歴史的考え方とか、スポーツイベントのマネジメント、あるいは高齢者ターゲットのスポーツ・フォー・オ

ールとか、いろいろなテーマをそれぞれの国のニーズに応じてやっていました。最近は途上国のアフリカなどを中心に CLC 指導者養成をしているのが 1 つの動きかなと思います。

考えてみれば、日本生涯スポーツ学会も生涯スポーツ指導者の養成が課題です。野川春夫先生とも時々話しますが、日本スポーツクラブ協会で行っている運動部活動指導士の養成講習会を始めて 5 年近くなります。かなり熱心な方が受講してくれますので、それを日本生涯スポーツ学会とうまくジョイントできないかなということを話していたことあり、そんなふうに発展してくれたら嬉しいかなと思います。

工藤：ありがとうございました。運動学とかコーディネーションが生まれたライブツィヒで、しかも旧東ドイツのアスリートの中心地だったライブツィヒにおいて、生涯スポーツ学が立ち上がろうとしているのは非常に印象的な感じを受けました。ありがとうございました。

清水：工藤さん、ありがとうございました。そのほかの皆さん、いかがでしょうか。よろしいですか。はい、山口先生、本日はどうもありがとうございました。もう少し時間がありましたら、都市におけるスポーツについて、生涯スポーツ論という側面から語っていただけるのは先生しかおられないと思ったのですが、またこのテーマで話していただくと 30 分以上かかるので、このくらいにします。

山口：神戸についてですね。はい。昨年、「世界パラ陸上」を神戸で開催しました。そこに関わっていたので、神戸のスポーツ史からいろんなことを入れて考えたいですね。「ONE クラス応援制度」が発案されて、企業や団体が 5 万円の寄付で子どもたち 1 クラスをスタジアムに招待するシステムができたんです。そのことを SSF（笹川スポーツ財団）の「スポーツオンライン・コラム」に書きました。「世界パラ陸上」のレガシーについて考えることができましたので、ちょうど原稿をアップしたばかりですので参考にしてください（ONE クラス応援制度：神戸 2024 世界パラ陸上のレガシー，山口泰雄，SSF，2025.8.26）。

清水：ありがとうございます。まだまだ聞きたいことはたくさんあるのですが、本日は山口先生の研究、「生涯スポーツ、スポーツ・フォア・オール」について幅広く、そして研究方法論も含めて語っていただきました。ありがとうございました。先生、最後に一言お願いいたします。

山口：「スポーツ・フォア・オール」と言われましたけれども、「Sport for All」という原語から、私は一昔前からおかしいんじゃないかなと思っていて、ずっと問題にしてきました。TAFISA の設立時の 1991 年に、文部省生涯スポーツ課本間課長の呼びかけで、TAFISA-JAPAN が設立されました。当時の日本体育協会、健康・体力づくり事業財団、笹川スポーツ財団等に加え、学識者により構成され、2019 年に東京で第 26 回 TAFISA World Congress

を開催し、世界 78 カ国・地域から Sport for All 関係者 638 名が集いました。2013 年の TAFISA-JAPAN の理事会において「スポーツ・フォア・オール」をやめて、英語の発音通りの「スポーツ・フォー・オール」にしませんかと提案し決まりました。ちょうどラグビー界でも「ワン・フォア・オール、オール・フォア・ワン」が「ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン」に変わったことが後を押してくれました。

今日は、何か取り留めのない話ばかりしたような気がします。でも、若い方が随分参加していただき、いろんな質問をしていただいたことによって、楽しい時間を過ごすことができました。最後に、こんな貴重な機会を用意していただいた清水先生、水上先生、高峰先生にも感謝申し上げたいと思います。それから、もちろん参加者の皆さんにも御礼申し上げます。本日はありがとうございました。

清水：ありがとうございました。高峰先生、最後よろしいでしょうか。

高峰：ありがとうございます。予定よりも 5 分ほど延びてしまいましたけれども、山口先生からご講演いただきまして、第 2 回のオンラインレクチャーを終了したいと思います。皆様、引き続き 3 回目以降もご参加いただければと思います。

本日はご参加いただき、どうもありがとうございました。これにて解散したいと思います。